

仏教童話 「琴の音色」 (雑阿含経巻第12)

お釈迦さんがコーサンビーのゴーシタ精舎にいた時の事です。

精舎にはたくさんさんの弟子達が集まり、お釈迦さんの話を聞いていました。その話の中でお釈迦さんは、とある昔話を語りました。

昔むかし、あるところに一人の王様がいました。ある日、王様の耳元に、何とも素晴らしい音色が聞こえてきました。今まで聞いたことが無いほど綺麗な音色に王様は聞きほれていました。そしてその音が聞こえなくなると、王様はすぐ近くにいた大臣に言いました。「うむ。実に素晴らしい音色だった。」

おい！ あれは一体、何の音だったのだ？」

「王様。あれは琴の音かと思われませう」

「ふむ。ならばその琴の音を持ってまいれ」

「承知いたしました」

大臣はすぐさま部下に命じ、琴を持ってこさせました。しかし、王様は何やら不機嫌そうに言いました。「なんなのだ。これは」

「王様。これが琴でございます」

「私が必要なものはこれではない」

「ですから王様。これこそが琴であって、あの音色を作り出すのですよ」

「このようなものは要らぬ。私はあの音色を持って来いと言ったのだ」

「……と言われましても、王様。琴の音色というのはですね。つまり、このように支柱や胴と言われる部分があつて……、また弦というものが、こうして張つてありまして……、そして音を調整す

る糸巻きなどですね。いろんなものが組み合わさつて、この琴という楽器があるわけでございます。そして更に言えば、その琴を弾くためのつめも必要です。それに、それ相応の演奏者も必要なわけです。

それらがうまく組み合わさつて初めて、あの素晴らしい音色が現れるのですよ」

「……私はあの素晴らしい音色を持ってこいと言つたのだ」

「王様。音色というものは、自分自身を通り過ぎていき、そしてまた消えていくものです。ですから、さつき王様がお聞きになつた、あの素晴らしい音色も持つて来たりできるものではございません」

「ああ……。ならば、お前のよこした偽物に用はない。この琴と言うものは嘘偽りだ。」

しかも私達を惑わし、執着させる……」

そう言つて王様は、琴をたたき割つてしまいました。「今、バラバラになつた」

それを携へて行け。そして四方八方にぶちまけてまいれ」

命を受けた大臣は、更に粉々にしてから、あちこちにばら撒き捨てに行きました。

お釈迦さんは昔話を語り終えると、最後にこのように言いました。「琴の音は確かに聞こえていながら、次の瞬間には……ない。」

私達の五感や心で感じることも含め、この世の全ては、様々な条件や原因によつて生じ、変化し、また滅していく。

あらゆるものは移り変わりゆく。永遠に変わらないものなどないのです。そうと知つているにも関わらず、私達はこう言つてしまうのです。

これが私(我)、これは私の物(我所)と。しかし、これらも確かに感じながら、次の瞬間には……ない。

弟子達よ。このことをよく観察し、参究なさい」

観察し、参究なさい」

メッセージ

あらゆるものは移り変わりゆく。無常(常なるものは無い)



私も「さんわ」で建てました

森町店

横浜市青葉区たちばな台 佐藤 昌城様 古里(杵築)のお墓



お寺様、家族の皆さんで 閉眼供養



解体整理の後



拝啓 立春とは名ばかりの寒い日が続いておりますが、社長、山上様をはじめ皆様お変わりなく、益々ご清栄のことと存じます。先般の閉眼法要・墓石解体工事については、一方ならぬお世話をいただき本当にありがとうございます。私、昭和39年に上京し、現在、横浜市内に居住しております。ご縁を頂いて、「東京大分県人会」、「在京杵築市人会」等に在籍いたしております。毎年、墓参りは行っているものの、加齢に加え、50年100年先の不安を抱くようになりまして。そこで上記県人会

の諸先輩に相談して色々ご指導をいただきながら「改葬」を決意しまして、お陰様で新しい墓所も決まりました。ところが最も大事な「閉眼供養とお墓の引越始末」については、軽く考えていたためにどうしたらいいのか判らなくて途方にふてきた時御社から「お墓のさんわ」のお便りをいただき、早速電話してその時説明をして呉れたのが「山上」さまでした。山上様は、私が不安に思っている胸中を察してか？改葬手続き等についてさらりと説明された後、「長年地元でやっていますので、きつと佐藤様のお役に立てると思えますよ。社長に電話させますから何なりとお申し付けください。」とまるで私の心の中がみえるかのごとく懐かしい大分弁で、その人情味溢れるお人柄に触れたひと時でした。渡辺社長からの折り返し電話で、改葬の件

等についてのご説明をいただき、私からの愚問に対して、丁寧にして誠意あるご指導を賜つた後、工事依頼となるのですが、その経過等は、渡辺社長ご案内のとおりです。渡辺社長や山上様のお陰で、「終りよければ全て良し」の習い通り、掉尾を飾ることができそうです。本当に有り難うございました。改めて、改葬に関してこれまでの経過を私なりに回顧しますと

1、人間関係の重要性 県人会の先輩のお陰 2、情報化社会の活用 事前にお送り下さった 「お墓のさんわ」で 御社を 知り得た 3、相手の立場に立った 誠実な対応(株式会社 三和の基本姿勢) 社長、山上様の姿勢 豊富な知識に基づく経験と実績 渡辺社長のお話から 人間味溢れる誠実さ 渡辺社長、山上様のお話から 人材(社員)育成 山上様